

## 新主体性論争

—詩作の基盤として

内藤道雄

身代りにほく自身を体験してくれる者などいないことも

しかしほくは知っている

ほくの代弁をするなどということ(1)を

だからほくはだれにも許さない

マルコヴスキー

詩とは、最初からいきなり約言のもつ粗大さをおそれずにいえば、世界経験の起点である自己の具体的実存に終始密着して、しかもその自分が世界内の現存在であるという自覚のうちに、世界と自己自身との弁証法的緊張関係を直載に、つまり超時間的に規整した建前としてではなく、全存在的な本音として表現しようとする言語の、しばしば反言語的な、試みではなかるうか。だがこの試みは、その助走さえ至難と思われるほど絶えず脇道にそれる誘惑に曝され、あるいは脇道にそれることによってみずからに跳躍を可能ならしめたという歴史をもってい

るのである。宗教、形而上学、神話、絶対詩の美学、イデオロギー等々。

ここでいまあらためて、主体性とは詩人にとって何を意味するものかということが、というよりも詩人の主体性とは——とはいえ詩人にのみ何か特殊な主体性というものが存在するということではないが——何を意味するものかということが問い直されなければならないと思うのは、七〇年代に入ってから西ドイツで抒情詩がにわかにな、いやな言い方をすれば、活況を呈しはじめたいわば歴史的現実が、たとえばあの、現代は抒情詩にとって悪い時代である、というような理解の把握できない次元における主体性の確認を要請しているからである。

一九七五年の書籍市で、出版業界が詩の新しい世代を、「新しい感受性」、「新しい内面性」、「自己経験の文学」、「新しいプレイバシーの文学」といったふれこみで表沙汰にして以来、文芸誌もこれを六〇年代から七〇年代にかけてとは別な文学現象として、しかし大ていは懐疑的、否定的あるいは当惑げにとりあげるようになったが、なかでも七七年の『アクツェンテ』誌二月号にビーレフルト大の文学者イェルク・ドレーヴスのよせた評論は、彼の期待に反し、だがその内容からいって当然ながら当該詩人たちからは無視された形で、論争としては貧弱な尻切れとんぼ的なものに終ってしまったものではあるにしても、古い概念と思维構造の、新しい現実への対処の有様を通して、はからずも、この要請がどのようなものであるのかを逆説的に明確化するという役割を演じるものであった。ドレーヴスの見解は大要次のごとくである。

いまさら「新しい主体性」などというが、作家は自分自身以外にどのような経験と認識の手段をもっているのだろうか。自分自身の自我を通して以外にどのような媒体を通じて経験しうるであろうか。にもかかわらず今あえて何か新しいものを認めねばならぬとすれば、それは「新しい内面性」の詩人たちが共通の背景としてもつ

六〇年代後半の政治的経験である。彼らは、歴史的発展には理性が存在するという改革の展望の中に自己の存在了解をみようとしていたのであったが、連帯性の希望の崩壊、政治的展望に対する幻滅を経験させられ、歴史的な日常生活の中へ、あるいは友人仲間の狭いサークルの中へ後退したのである。自分自身の主体性、個別的具主体性、自己の日常といったものへの転向は、みずからすすんでなされたものではなく、よりよきものの欠乏から生じたものだ。個別性へのこのやむをえぬ帰還の事情は、「新しい内面性」、「新しい主体性」の抒情詩に認められるメランコリーがおおよそ説明をつけている。彼らの詩作において如実に表現されているといえるものは、せいぜいこのメランコリーと絶望であって、希望となるとただ時おり弱々しく暗示される程度である。そしてまたユルゲン・テオバルディー、ライナー・マルコヴスキー、ニコラス・ボルン、ギュンター・ヘアブルガー、ゴデーハルト・シュラムらにみられるように、彼らの没頭するのはひたすら身のまわりの事物であり、彼らの詩の特徴は、やさしいナルシズム、自己憐愍であって、主体性を確立すべき思惟の方向というものがまるでない。広い意味での政治性もなく、言語的にも、また自己探及の厳しさにおいても、鍛練が欠けている。彼らは、芸術的形而上学、隠喩、暗号言語、密室儀式を拒否し、言語に新しい簡素性を獲得し、やさしい言葉によって読者層を拡大したと主張するが、言語の簡素化は七〇年代の詩作の業績ではない。すでに六〇年代に、いやすでに政治詩の伝統の中で実現されてきたものである。彼らが求める単純性とは、言語的思惟的反省をみずから放棄し、新しい無邪気さをつくりだすことにすぎぬのではないのか。したがって経験の言語的表現の可能性はかえって制限されてしまっていて、しかもその経験の地盤が自分の周囲の日常世界ときているから、テオバルディー、シュラム、マルコヴスキー、コンィューツキーにみられる通り、その表現も型にはまったものとなるきらいがある。要するに

彼らは、クリストフ・デアシャウにその極端な例がみられるごとく、詩的態度の厳しき、芸術言語の格調などに背を向け、散文朗詠調の、エピグラムやバラード、気分、思出、身の回り辺の観察、政治情報などをもりこんだ無形式で冗長な、ちゃんこなべ的な詩を書いているだけのことである。デアシャウの場合は、それでもせめてナルシズムのアナーキーが綱領的なものとして存在するが、テオバルディーなどは、俗受けをねらった読者抱擁の試み以上の何ものでもない。これがざっとドレーヴスの発言の概要である。クリストフ・デアシャウにこんな詩がある。

あれの年だった

(でなきゃ どういやあいんだろう)

「非政治的でいられる権利が はたして

あるだろうか」なんて問や精神とはおさらば

「バックでせめてえ！ ワンワンスタイル

でなくっちゃいやあ！」

とあの子がいうものだからばくは愛にもえ

気も狂わんばかりにハッスルしちまった

なせこう始終自分には生きる能力がないと思うのか？

雨が降っている

ところが思うんだな

今夜は月がめっぼう明るいよ

.....

てなこと書いている俺って何なんだ？

.....<sup>(3)</sup>

格調高い芸術言語、芸術的形而上学を口にする批評家とこの詩人との間には、前者にとっては非常に不愉快になるほど距離がある、というような減らず口をたたくのはよすとして、またドレーヴスが出来のよくない作品、もしくはそうした部分のあげ足とりをやっている点は無視するとして、いささか一方的な彼の論評の中に、その独断の根底をなすものをみずから示唆する言葉のいくつかをとりだしてみよう。たとえば、「よりよいものの欠乏ゆえの自己回帰」、「認識の手段」、あるいは「政治性もなく、言語的にも、また自己探及の厳しさについても鍛練が欠けている」といった発言である。

ドレーヴスの見解の根底にあるものは、詩作における「認識手段」は客観的認識の構造を前提とするものであるという観念であり、主体性の確立ということも、この客観的思惟によってのみなしとげられるはずであるという世界把握である。つまり彼は、客観的分析的認識によって実現されるかの「ゾオン・ポリティコン」の主体性といった虚構の図式を「新しい主体性」にもあてはめようとする手違いを犯しているのである。

われわれの知覚や経験の一切が生ずる領域である世界は、その知覚経験や思惟に先だち、否定しえない所与として存在する。思惟の何らかの活動による濾過に先立って不透明に存在する。だから人間存在の「被投性」を無歴史性の觀念で理解しようとするのは誤りであって、世界に投げだされているということは、世界内のあらゆる関連、関係の外に放りだされているというようなことではなく、世界の中に、その相互作用、矛盾対立の中に投げだされているということなのである。しかも世界経験の起点は、われわれ自身の具体的、個別的な実存であり、現実を刻々支えているのは、これといわば弁証法的に対峙する自分自身であるという緊張関係の中に、われわれは世界内存在として存在しているのである。ところが反省的思惟は、世界内存在としての知覚経験に由来するといふみずからの素姓にもかかわらず、その実存経験の不透明と錯綜を逃れ、日々の経験や生活とは別次元（虚構）の可能性としての自我へと飛翔（あるいは墜落）し、精神の活動の一切に先立つはずの世界存在を、倒錯的巨視的にみずからの普遍的総合作用の下部構造としてしまふ性質をもつ。つまり人間の現存在の現実を説明可能な客観的現実としてしか把握できず、したがって説明不可能な不透明な事情は、現実の廃棄につながるおぞましいものとして回避、あるいは無視あるいは削除してしまうという本質的傾向をもっているのである。このことの確認は、これまで対立するものとみなされてきたもの、たとえば自然主義と新ローマン主義、社会的リアリズムと唯美主義、あるいはルカーチュのいう具体的可能性と抽象的可能性といったようなものも、根本的には決して対蹠的なのではなく、同じ精神志向のいわば従兄弟的現象であることを判明にする。ここで格好の例として、ゴットフリート・ベンを引きあいに見てみよう。彼は、結局は客観的普遍的なものの存在にとりつかれていた。古い普遍的価値体系の崩壊に直面すると、「現実などというものは存在しない」と彼はみずから言いわたした。

では彼にとってリアルな存在は何かというと、「存在するのは人間の意識だ。人間の意識がその創造力によってたえず世界を形成し、変形し、耐え忍び、精神の刻印を押するのであ」<sup>4)</sup>。ベンはこの宣言は、彼の詩的意志の構造を告白するものとして、その限り意味あるものだったにしても、ここに歴然と示されているのは、現実の深淵を脱し、自我意識をその日常の経験とは別な次元の普遍的な法則の可能性として捉ようとする虚構の意志である。この意志を伴んで彼は詩を構築しようとした。もっともゴットフリート・ベンは後の、しかし溯ればアルノー・ホルツにいたる、言語のまったく美的虚構を狙った前衛主義者たちとは違って、究極的には昔ながらの形而上学的理念にとりつかれていた。要するに彼は、「すべての体験しうる内容」に先だって自我は確立されるものとして、つまり世界内存在である個々人の意識に先だつ非人称的意識を虚構し、これによって現実の不透明な偶然性を排除してしまおうとした。彼の主張した創造的精神は仮構の精神である。

ところが文学の政治化は、詩作をいわゆる歴史的社会的現実の諸関係の中へひきこむことによって、抽象的觀念の虚構（美的形而上学、内面性、自然神話等々）に最後通告をつきつけた。このことはそのかぎりにおいて功績であったとはいえ、しかし実はここでも歴史的重要性をもつイデオロギーへといわゆるたかめられた客観的認識が唯一現実的なものとして通用しているのである。具体的実存的な、すべてが絡みあつて錯綜した無限定のいわば開かれた世界は、その世界を超脱し客観的な展望を要請する精神の認識作用の対象として世界は対象化されたがって、独自の多層性、複合性、分裂性を含む世界経験の起点である自分自身も、本質的に他と交換可能な一対象と化してしまっている。これはあきらかに、形而上学的理念へと自己を救いあげようとする精神の志向と根本的に同じものである。六〇年代は、政治的展望とかイデオロギーを、かつて形而上学的理念とか宗教的世界

観にかわって、詩のモチーフとして、あるいは少くとも詩的空間に一貫性をもたらす通奏底音としてもちいることを詩作の当然の倫理的前提としたが、これとてもやはり個別的実存の経験的現実、換言すれば、歴史的社会的な諸関係に還元しきれぬ人間的現実を背を向け、いわばヘーゲル的な意味における人間把握、つまり思惟の疑問的現実の勢力圏に逃げこむものであった。

ユルゲン・テオバルディーは一九七六年に彼の編集したアンソロジー『されどぼくは動く……一九六八年以前及び以後の詩』のあとがきの中で、「米国のブラックパンサーの指導者殺害に対する抗議デモに午後集まり、その晩には映画館で反動的な西部劇を見て喜ぶ……とするならば、このような経験は抽象的、啓蒙的な詩には表現できるものではない」という風に、自己経験の現実の構造をたとえ話に簡略化して素描した。この事態の深刻さをテオバルディーは十分洞察しているかどうか、あるいは自分（ないしは自分たち）の詩作には表現可能なのだと信じているかどうかを質するのはここでは留保することにして、彼の素描してみせたものをさらにサルトルの言葉をかりて補足するならば、「われわれは自分自身について、おそらく、部分的でかたよった何らかの認識をもつだろうが、しかし自分が何者であるかを完全に知ることはわれわれに禁じられている。存在と思考との乖離は完全である。記憶は想像と区別されず、過去はわれわれから逃げてゆく、というより、永遠の嘘が現在につきまとい、その意味を奪い去り、それによって現在を変質させてしまう」のだということである。「いかなる人間も自己の人生を全体化することはできない、事実においても、また想像においてさえも——言語表現が本質的にそれと対立する——」（細田訳<sup>6</sup>）。七〇年代の詩人たちは、このことを、すなわち自己経験の現実が社会的歴史的共同生活の諸関係を根ざす世界把握や——社会生活者として、これを遂行する能力を有しているとしても、その

ことも含みこんだ上で——客観的現実認識の描く——テオバルディーの用語では抽象的な——展望の中に包摂されてしまうことはないという事実を、少くともそれぞれの実存体験を通じていまやっと再確認するにいたった詩人たちののだということはず大ざっぱに言えるであろう。

ところがドレーヴスの批評の方は、客観主義的思惟の枠組の中にあつて、彼は詩作を詩人の生活感情を具体的な可能性の世界を志向する意志に転位する「鍛練」の一過程でなくてはならないという風に理解する。彼は、したがつて、たとえば政治的な世界把握をテーマとする場合、そしてこれの基盤となる意識構造からすれば、その認識の統一を獲得するために、現実廃棄につながるものとして排除もしくは無視なくてはならぬ与件に、詩人本来の主体性にとって（決して「よりよいもの欠如」ゆえに仕方なくというのではなく、いわゆるたかめられた生活経験と称される原則的なものが虚構でしかないということの自覚から）、欠くべからざるものの存在を、新しい詩人たちは認めているのだということに、気づかないようである。

メランコリーと絶望を、「新しい主体性」の詩人たちの作品の否定的属性として咎めだてるのは陽気にすぎはしまいか。第一、現代の世界を論じて意気揚揚たる者の方こそよほど胡散臭いが、メランコリーは、擬制を恃んで主体性を確立することの空しさを幻滅的に自覚した者にとってみれば、その誠意のあかしではなからうか。われわれ自身の実存は、一生涯この時間から超越できる絶対的なものなどもっていないというのは、憂うつな真実ではなからうか。自己の実存は、ベンの主張したように、自分の意識に還元しつくされるなどということはない。主体性の確立とは、何らかの絶体的なものを志向するなかに実現されるものではなく、むしろそうしたものを絶えず相対化せずにはおかない自己の具体的な生活状況に忠実な始めも終りもない自己更新以外にはないだろ

う。

\* \* \*

『アクツェンテ』の次号、つまり四月号に、ドレーヴスの批評を「占星術師的」ときめつける反駁文<sup>(8)</sup>を寄せ、論争にいわば応じた詩人はわずか、ユルゲン・テオバルディー一人であった。「星占いをやろうとする男は、まず猥褻記号をさだめる。すると後は各人がそのあてはまる部分を自分に関係させられるよう星占いをやればいい。」

テオバルディーは、「新しい主体性」の詩人たちの中では、六〇年代後半から七〇年代にかけての、あの学生運動に象徴される政治的な時期の体験を、つまり「政治的希望の挫折」という世代共通経験を、もっともナイーブに意識の中にひきずっている詩人であるから——もちろんこれが彼の詩人としての斬新さを保証するというのではないことは断っておかねばならないが——ドレーヴスが、「新しい主体性」の自覚の歴史的条件を考慮することなく、ただ七五年あたりの、ジャーナリスズムのレッテル用語である「新しい内面性」にのっとって、詩人たちが社会的歴史的现实の中の現存在から、主観内部への運動に逃避するという図式をたてたとして、ここに非難を集中した。要約するところである。

ドレーヴスの理解する主体は、まさに若い詩人たちの一部が打たねばならないとしている当のものである。彼は、歴史的社会的现实に背を向けた内面などというものをはや可能ならしめない歴史的社会的现实の体験の自覚を欠いているために、いかなる嵐の中にあっても地上の歴史から背を向けた自律体といったブルジョア的個我的観念に固執し、したがって「自己自身の主体への転向」ということを昔ながらの甘美な抽象的庭園に帰り、自

分を幻惑させることのようにしか理解しないのである。今日、主体というとき、それはちっほけな生に、政治的な歴史を借りてきてかたをつけ箔もつける自我といったようなものではなく、社会の諸矛盾の浸透した社会的容量としての具体的人間の主体が問題になっているのであって、この主体への一步前進によって、政治的であろうと個人的であろうと、社会の諸矛盾が体験されるのである。

テオバルディーのかなり感情的な口吻がドレーヴスに対し有効な説得力をもったかどうか疑わしいが、彼の言おうとしていることはごくまっとうなものである。普遍的虚構を虚構として相対化しつつ、世界経験の原点としての個別の実存としての自己に密着しようとする態度を、昔ながらの内面主義の図式でとらえようとするならば、「新しい内面性」といったジャーナリズムの与えた標札は、古い内面性との世代的色合いの差ぐらいにしか把握できないことはいうまでもない。

日常の身のまわりにかまけることが、歴史的社会的現実から遠ざかり、身をかくまうことになるのか、そういうことを鋭敏な感受性に対し現代はいまなお可能ならしめるのかどうか問うてみるだけで十分ではなからうか。政治討論会の会場より、廃油漬けの魚を調理するマイホームの台所の方が社会的現実から遠くにあるのかどうか問うてみるだけでも十分である。

たとえば、七七年に第一詩集『マインツヘー』をだしたウルズラ・クレッヒェルは、学生運動の盛んだった時期に学生であった一人である。

疲れ 足に水ぶくれをつくって

放水にずぶぬれて 泥まみれのまま

帰宅し 腹に何かつめこみ

そしてまた映画を見にゆく

というようなことは もう今はない

少くともこの道路はわれわれのものであり

そして当然ながら未来も

いますぐにではないにしても近いうちに

と考える

というようなことは もう今はない

.....(9)

そして今彼女の生活において、道路解放区の象徴するようなはかない虚構よりも、たとえば台所やスーパーマーケットにおける私的な体験の方が、より深刻に社会的現実に浸透されているのである。

アパートの部屋代を払ってしまえば

ガスや水道のささやかな喜びのための

料金分担分を計上してしまえば

コテージクリーム エメンタールチーズ

冷凍ほうれん草のパックを

冷蔵庫からとりだし 食べてしまえば

あなたのうす汚れたズボンがよれよれになってしまえば

私たちはまったくの素寒貧 でも

心の声がささやく

私にはあなた あなたには私がある と

ところが彼らは私たち二人とも掌中にしている。<sup>10</sup>

「新しい内面性」といったトレードマークをつけられた彼らには、ブルジョア・ロマンティズムが抱いてきたような、いわゆる外界とは無関係な主体の内的自律などという領分はない。——もつとも外界との具体的な関係の中にある具体的な人間は、抽象的な可能性を夢想したりしない、というような単純な図式もまた彼らには通用しないだろう。彼らは、自分が世界内存在として現実の諸条件に——単に経済的条件のみならず、誕生以来のあらゆる偶然が現実的契機としてつきつける私的な条件、素質や肉体的条件などもすべて含めて——決定づけられていることを自覚すると同時に、しかも自分自身は客観的に対象化してしまえぬ世界経験の起点であるという

認識との緊張関係を生きようとするのである。ドレーヴス流に言えば身のまわりの日常世界にひたすら沈潜している、というようなみえるガブリエーレ・ヴォーマンについてさえやはりこのことは言えることだ。

テレビコマーシャルのように湯気のたちのぼる

自分たちのコーヒー茶碗を眺めていて ふと

私の心はなごんだ

このたちのぼる湯気が自分のせいだから

.....

すると自分が創始者だなんていうことは

嘘っぱちなのだという心持になった

.....

こういうものは もっぱら

テレビコマーシャルの中だけのこと

私のためではない

私はたちまち 思いうかぶことを実行にうつせなくなった

愚かしくも私は自分の飲む姿を思いうかべた

茶碗に手をのばし　つかみ持ちあげる姿を

私は萎えたようにとり残されていた。<sup>(11)</sup>

先のクレッシェルにしても、その詩作は手法的にごく素朴であるし、「彼らは私たち」を、といった抽象的な認識によって自己経験をいまなお規制してしまっているのであるが、ドレーヴスのように、古い図式を正当化するために若い詩人たちの表現の未熟な個所をのみ取りたてるのは性急すぎはしないだろうか。

しかしまたテオバルディーも奇妙なことだが、言語表現の不可能性にはまるでたちいっていない。ここにはドレーヴスの固執するような芸術言語の密度とか思惟の鍛練とは別種の深刻な問題が存在するはずなのだが、テオバルディーは彼の反駁文を次のように結んでいるだけである。「今日、詩は言葉の不完全性に対する絶望からではなく、世界の不完全さに対する絶望から書かれることが根本的に重要である。世界はまことに人間にふさわしくない様相をしめているから言語もまた無力なのだ。」

\*

\*

同年の『アクツェンテ』六月号には、続いて「不完全な主体性」と題するハンス・ディーター・ツイーママンの論文が掲載された。これは全体としてドレーヴスとテオバルディーの論争に直接加わるものではないが、ただついでのようにツイーママンはドレーヴスの論文に触れ、彼が主体性を自分自身がどう理解しているのか明確に

してないと批判した。この批判の当否はともかくとして、ではツィーマン自身はどのなのかというところ、「今日有効性を主張しうる唯一の認識論は、実験者自身が実験体系の内に含有されているという原子物理学の洞察にもとづくものである」というサルトルの言葉を引用しつつ、現実の世界で現実の人間をしめそうとする者は、主観からそっぽを向くことはできないというにとどまっておき、結局は、観察し記述し反省する主体だとか、観察され記述され反省される主体だとかいった言葉の空虚なくり返しをやっているにすぎない。

論争を正面から、いや、より正確にいうならば、おかしな側面からとりあげたのは、同誌八月号のルートヴィヒ・フィッシャーであった。<sup>(14)</sup>一九六〇年代後半に政治的洞察から連帯への希望を展開し、実際的な変革への参加が可能になると思ひこんでいた多くの社会的に敏感な者たちはその政治的展望の信仰を失ったため、この結果として仕方なく個別へと帰還したのだというドレーヴスの見解に、フィッシャーがどうしても異論を唱えずにいられないのは、個別へと帰還するとう場合のドレーヴスの理解の構造に対してではなく、個別に帰還しないものがあるということを強調したいからである。いわゆる学生運動の挫折や、社会的変革の足がかりとして連帯的行動の組織化をめざす助走の空しさを体験した当の者たちは、「いまやふたたび自我にみずからを対置する」という状況にさしもどされたとは思っていないのだったためである。フィッシャーによれば、政治の理論と実践の二者択一的内容と形式がまさに歴史的現実という外側からの圧力によって押しつぶされると同時に、自分の内側からも崩壊していったという悲痛な経験は、理論において、及び自己の洞察においていたらなかった点について反省し、「抑圧的寛容」の、あるいはあからさまな抑圧の歴史的理由を明らかにし、限定された実践の中で仲間と議論をすすめてゆく努力を要請するという。そういう仲間がいようがいまいが、ドレーヴスの見解

に対する異論としてここに提示されたフィッシャーの主張は、七〇年代の詩人の「新しい主体性」に関していえば、まったく無意味なものといわざるをえない。しかしとにかくフィッシャーもやはりまた、世界の政治経済的把握が——そのために具体的人間の現実を単純化し、実存経験の不透明性をはらいのけてしまうのであるが——人間の現実をもっとリアルにとらえるものであるという客観主義の観念のとりこになっていて、彼は、自分が熱心にもとめる議論とか展望とかいったものを支える絶対的な基盤としての思惟構造が具体的実存にとっては、相対化されねばならぬ虚構を指向するものでしかなかったという幻滅的発見のある種の者たちになさしめたかの「政治的希望の挫折」の歴史の意味をさえ認めまいとするのである。彼の意味するような歴史への現実的な働きかけに関し、抒情詩がいかに無力なものであったかは、歴史はすでに実践ずみではなかったらうか。詩的表現による政治的アンガジュマン、詩作に対し社会の公器へと召集する態度は、根底において所詮楽天的ロマンチズムが困難な時代の流行に裁断をあわせようとしたものにすぎない。

話がいささか横道にそれるようだが、ドイツの精神風土には根づかぬといわれ、左右のイデオロギーから胡散臭がられつつも、ポップやロックは六〇年代後半になるとあらゆる階層の若い世代に拡がり一つのジャンルを形成するほどにまでなった。そしてディスコテークに出入りする者たちは、それぞれ自分自身に、自分自身の肉体に固執し、一搬性とか統計的現実などの意に介さない連中である。彼らの行動や態度は、権力の「抑圧的寛容」に対する批判的<sub>15</sub>回答であるというような社会学<sub>15</sub>的把握は彼らの感性を左右しない。歴史的社会的認識から自己を対象化する思惟形式を彼らはうけつけない。彼らはひたすら自分の身体的経験をを通じて予測外の自己を獲得することに夢中になっている。「新しい主体性」の詩人たちのなかにいわゆるロックの世代がいても少しもふしぎで

はない。

いまだになお熱心に、詩の政治的主題の有無にこだわっているフィッシャーは、それだから、テオバルディーの編集したアンソロジーをひもといても、「やりきれない事物Ⅱ魔術」しか読みとれず、「対象や環境、そして日常世界の人間たちがただもうくり返し引用されるだけである。これまで抒情詩からしめだされていた現実の構成要素をただ列挙することだけが、日常的現実に対する感受性を保証するかのように」ときめつける。そのくせ彼は、ジャーナリズムが「新しい主体性」などと取り沙汰しはじめた七五年にはすでに不慮の死をとげてしまっていたプリンクマン<sup>(16)</sup>についてドレーヴスは歴史的事情を知らぬ証拠に一言ものべていないとテオバルディーが貶しているのをおそらく意識してであろう、そのプリンクマンには留保をつけ、「ロルフ・ディーター・プリンクマンの場合は、非文学的な、詩的でない様相を誇示する周囲世界の知覚の慌しく性急な列挙に、歪曲し人を傷心させる現実の中でへ身を処すことができず、そして負傷の記録によって自己の体験能力を確かめようとする者の病熱的な手さぐりのようなものがまだ認められる」と解説しているが、ここに表明されているのは、フィッシャー自身の現実に関する固定観念と古めかしい文学概念でしかない。ドレーヴスに異論を唱えた彼はその分だけあからさまに、「新しい主体性」の詩作を非難するのはむしろ当然なことといえるだろう。曰く、「諸対象に対する悪しき直接性」、「みずから呼びこむ対象や情況及びこれと密接に結ばれた現象に、社会的矛盾の経験の報告の信憑性を保証させようという怠慢」。フィッシャーの現実観念によれば、現象は社会的矛盾を覆いかくすものであり、だからたとえばニコラス・ボルンのような——と彼は槍玉にあげられるわけだが——「再現と陳述の身振り」でもって、「現実的なものは可視化」できないということになる。あきらかに彼もまた現実を、というよりむ

しるその一部を、理念から逆に演繹的にしか把握できないわけであり、また理念づけられた感情しか、真実の感情として感受できないのである。彼の思惟は、イデオロギーによる人間的現実の組織化によって、現実的なものを先取してしまうという七〇年代の詩人たちがまさに「おさらばした」構造をもつ。

もう一度くり返していうならば、政治詩や社会詩のように、あらかじめ主題を選定することによって詩にあたかも歴史に働きかける積極的な外観を与え、社会変革に参与させようとする行為は——これが結局どれほど無力なものであったかは、そのような詩人たちの耐えがたくひとりよがりな浪漫的情熱を掃きたてながら歴史的社会的現実の状況が示したのであるが——客観的認識の図式に抒情的彩色と言語遊戯の自己陶醉的精神空間を与えるほどの意味しか詩作にみいだせなかったのではなかったか。詩の新しい世代といわれる者たちの、様々な資質の後の共通項としていえることは、自己の日々の具体的体験の深淵とは別な次元に認識の拠点をもとめようとするそのような精神構造の拒絶を彼らの詩的主体性の欠くべからざる前提にしているということである。彼らの自我構造は、詩作に先だって建前のにあらかじめ存在する普遍的概念に包摂されない世界経験の起点である自己自身に密着したものであり、つまりまったく私的な、他人には決して代行も代弁もできないまったく個人的な経験の次元に身を挺し、矛盾、錯綜、分裂にみちた深淵のただ中で、世界と対決することにおいて自己の主体性を志向するものなのである。

\*

\*

一九七七年度『アクツェンテ』誌の最終号である十二月号に、これまでの論文の総括のような——その必要はなかったが——役を買ってでた西ベルリン教育大学のペーター・M・シュテファンは、主体性について次のように述べた。「古代の美的反省から今日のマルキシズムにいたるまでくりひろげられてきた様々な見解の中で、 $\wedge$ 主体Vの概念について一つ共通するものがある。それは具体的な人格に結びついており、自分に対応する客体から自己を定義する。つまり世界、現実、日常の事物、社会、相手などからである。主体は決して精神的抽象物や集団的無名性ではなく、代数学の未知数のように、その機能にもとづいて計算される $\wedge$ 社会的容量Vでもない」。この寸たらずの総括は、彼自身の馬脚まるだしである。「精神的抽象物」ではなく、具体的な自我と世界との対応関係のうちに把握すべき主体が、なぜ「未知数」であってはならないということになるのかといえ、シュテファンもつまるところは、世界にさきがけ自我は存在するという無時間的思惟の枠内において、「主体は、……自分に対応する客体から自己を定義する」ということも、経験を先験的観念によって整理し、単純化し、偶然の入りこむ余地のない抽象的概念に化してしまう操作にすぎないからである。シュテファンもだから、結局は、フィッシャーらの見解を根本的には反復しつつ、テオバルディー、デリウス、ボルンなどの作品のあら捜しに終始するほかないのである。

われわれが世界内存在として投げだされているその世界は、思惟のあらゆる活動に先だって存在する。その一方でその世界経験の起点である自分自身の具体的実存の主体性は、決して対象化しつくせない「未知数」である。七〇年代の詩人たちの主体性が具体的に実現されるのは、決して何らかの抽象的観念にもとづく自己の内部ではなく、歴史的社会的な現実の生活における世界との刻々の関係を通じてである。しかしそれは思惟によってあら

かじめ到達された客観的認識——これが社会生活の実践の便宜上必須のものであるかないかは別として——による私的な自己経験の分析、検証という形で実現されるべきものではない。むしろ逆にたえずそのような認識のもたらす擬制の現実性を仮借なくつきくずす体験の偶然性のうちに、世界と対決しつつ矛盾と錯綜と分裂を含む自己の現存在の全体化を志向するこの志向の過程においてである。マルコヴスキーがあらためて詩作要請の前提として確認したように、この自己経験は自己の誕生や死とまったく同様に他人に代行できるものではない。ということはあのベンの主張した詩的自我的美的隠棲やリルケの世界観的孤独を意味するものでは決してない。

しかもこのまったく個人的、私的な世界関係の中に多様な与件が含まれ複雑にからみあつていて——つまり「社会的容量」<sup>(18)</sup>——いわゆるプライベートという言葉のもつ概念を越えた深い領域が、ここには開示されている。詩作は、ここに密着した言語表現の——あるいは言語の性質にさからう——試みでなければならぬ、という根本的な自覚は、「新しい主体性」の詩人たちに、その資質、対世界関係、言語感覚、生活環境等々の差異をこえて共通するものである。ただしこの共通項が彼らを集団にするなどということはもち論ありえない。

深みということに関し、念のため言いたしておく、自我は先験的に何らかの形而上学的法則にしたがつて存在するわけではなく、われわれの自我は、「原母」とか「祖父たち」に支えられているわけでもない。そういう奇妙な無時間的な内面の深みなど現実には存在しない。あの瞬間の中に永遠を見るところのも理念の錯覚ではない。現実の深みとは、どこまでも自分の存在場所、つねに現在という存在時<sup>(19)</sup>にあつてどこまでも私的でありつつ多様な錯綜した要素（体験、習得した知識、歴史社会状況の認識、想起、想像、欲望、感性、肉体等々）の「容量」であることによつて超個人的な地平をもつという意味での深みである。

「新しい主体性」、「新しい感受性」の詩人たちが言語表現の不可能性に直面するとき、その直面の仕方において様々な危険にさらされるであろうことはいうまでもないが、ただこの危険とは、ドレーヴス、フィッシャー、シュテファンらがこぞって指弾する詩的成果の不首尾にはなく、むしろすぐれた成果をあげる時に陥るいわば詩作のもつ宿命的な危険なのである。たとえばライナー・マルコヴスキの美的に統一された言語空間に対する繊細な感覚、ニコラス・ボルンの「快よい隠喩の中に坐す」傾向などにひそむ危険性である。最後に、詩的主体性をめぐるいわば綱領的な確認をしめすものとして、ボルン「詩の内部で」を引用しておこう。

おまえは現実と張りあって

生きてゆくことはできないし

現実をたのんで生きることもできない

しかし侵されても生きのびるし

すべてをとりもどす

そしてこの人生の中を歩いてゆく

たちまち稠落する形象の中を

それがおまえであった

おまえとそして生成する生と

あまたの人物を その墓石の重みにあえぎつつ押しだし

途方もなく苦勞して

自分およびすべての先祖たちから

自分をフェードアップさせる

山河は残った

そしておまえも残った

何のお膳立てする必要もない

ちっぽけな太陽がおまえの民主々義を照らす　そして

おまえは生と死を選ぶ

おまえは多くの美声をもち

おまえは複数

おまえの皮膚はおまえのものであり　そしてつまり

皮膚以外ではない

おまえは生の請負人

無垢の諸現象の主権者

母屋もひさしもない人間容量

歴史の経過の著者

おまえは時を書物のように印刷することができる

目方を測り 節にかけ そして愛する

口述器械の廢墟が風になびく

不条理の花ざかりだ

おまえは花 そして不条理

昼夜の別なく昼と夜だおまえは

自分自身の血の軌道を

運行する人殺しだ

おまえは父親にして息子

おまえは虐殺されたインディアン

しかも登録されたインディアン

おまえはすべての肌の色の人種

やもめにして孤児のおまえは

反逆者と囚人の兼任者

おまえはたえまのない咆哮

手裏劍銃弾

おまえは夢の距離のみごとな走者

民主主義の頭目の中の偶像破壊

おまえは鎖をすべて爆破する名人

おまえはひそかにきらめくスローガン

証票だ

自由料理の前衛だ

人間であるおまえは　そして

死を予感する瞬間の獣

おまえは独り　そして万人

おまえはおのれの死　しかも巨大な願望

自分のくりひろげる計画　そして

おまえはおのれの死だ<sup>(20)</sup>

「新しい主体性」は七〇年代半ばになってみられる新しい傾向として取沙汰されてきたが、この主体性の問題は、抒情詩の基盤にかかわる問題の反省をうながすものとして深刻な意義をもつ。

注

(1) Rainer Malkowski: WAS FÜR EIN MORGEN edition subhrkamp S. 64

(2) Jörg Drews: Selbsterfahrung und Neue Subjektivität in der Lyrik In: AKZENTTE 24. Jhrg. Hft. 1 Feb. 1977 S. 89-95

- (3) Christoph Derschau: DEN KOPF VOLL SUFF UND KINO Maro Verlag S. 51
- (4) Gottfried Benn: DOPELLEBEN Limes Verlag S. 67
- (5) UND ICH BEWEGE MICH DOCH... Gedichte vor und nach 1968 hrsg. v. Jürgen Theobaldy C. H. Beck S. 222
- (6) André Puig: L'INACHEVE Gallinard 『未完の書』(細田直孝訳)のサルトル序文、六頁。
- (7) 再確認どころなのは、これがらまはじめて認識論的に発見された事態ではなく、すでにニーチェは主体の不統一的多層性を予見してゐる、やらはカフカによつて、存在と認識の離反性は徹底的に表現されているからである。
- (8) Jürgen Theobaldy: Literaturkritik, astologisch Eine Antwort auf Jörg Drews In: AKZENTE 24 Jhrg. Hft. 2 April 1977 S. 188-191
- (9) Ursula Kreechel: NACH MAINZ! Luchterhand S. 24 Aus: Jetzt ist es nicht mehr so
- (10) Ibid. S. 14 Aussichten
- (11) Gabriele Wohmann: GRUND ZU AUFRÜCKUNG Luchterhand S. 30 Aus: Grund zur Aufregung
- (12) Hans Dieter Zimmermann: Die mangelhafte Subjektivität In: AKZENTE 23. Jhrg. Hft. 3. Juni. 1977 S. 280-287
- (13) Jean-Paul Sartre: Question de méthode の第一章の中でサルトル自身がつけた注解。シイマーマンはサルトルがポーランドの雑誌に寄稿した時の表題で独訳されたもの Marxismus und Existentialismus を読んでいるらしいがその引用独文を訳した。
- (14) Ludwig Fischer: Von Beweis der Güte des Puddings Zu Jörg Drews' und Jürgen Theobaldys Ansichten über neue Lyrik. In: AKZENTE 23. Jhrg. Hft. 4 Aug. 1977 S. 371-379
- (15) 「このことに関連して、広く世間一般が、いったい政治詩をどれほど読み、また関心を呼びおこされたりするものか問うてみるがいい。観察の結果ははっきりいって、民衆は、教養の有無に関係なく、抒情詩などほとんど読みはしない。したがって政治詩も読むことがない。西ドイツの政治詩人たちはそれぞれに労働者を意識し、啓蒙や呼びかけをこころみてきた。反響はとるにたならぬものであった。実験的な文体の詩の朗読を聞かされても労働者たちは何かおかしなものに思うか、訳がわからないと感じるばかりであった。アンガジュマン詩人たちがいくら労働者のために弁じるといっても、彼らの言語は労働者の言葉、仕事、生活様式にはびつたりこないものであった。……」

Ludwig Büttner: Von Benn zu Enzensberger Eine Einführung in die zeitgenössische deutsche Lyrik Verlag

Hans Carl Nünberg S. 134

(16)

Rolf Dieter Brinkmann (1940-1975) は、世界内存在である自己の現存在を全体化するという言語表現にとって不可能なことを、にもかかわらず直截にこころみた詩人であった。つまり彼の詩の言葉は、どのような統一詩的空間を構築することも拒否し、それぞれの経験、知覚、想起、行為の固有性を指示する断片のまま全体化志向の直截性を維持しつづける。

ぼくは壁ぞいに歩いた 西洋の一國

糞つたれ、子供たちの落書きがあった

腐った樹々を見た 川辺りに ぼくは見た語った

緑によろめいた 木の葉 細い形姿 軽やか

風に語る方が楽だ 樹木に 木の葉に

絵画の並ぶ美術館のひとけない通路

陰毛の中でうごめく毛ジラミ 解説者をてらすライト

並樹路に表われるルネサンスの天使 陰うつに

錦織りを着て自分自身とつむ 貨車が

陸橋を通過する 橋架に貼られたポスター ぼろぼろに

ゆれる暗がり 楽曲 ぼくは母親と語った

ぼくは呼んだ 母さん暗がりから出といで ストープは

こわれている どこにいるんだ？ 癌が彼女の乳房を喰いつくしたのだ  
.....

Westwärts 1 & 2 Gedichte Rowohlt S. 32 aus Schlaf, Magritte

- (17) Peter N. Stephan: Das Gedicht in der Marktlücke In: AKZENTE 24 Jhrg. Hft. 6 Dez. 1977 S. 493-504
- (18) テオバルディーがもし、「社会的容量」という時に、同じような仲間の集団的主体性などといったものを意識しているのであれば、認識の後遺症的甘さとして排除されねばならぬだろう。
- (19) Hiltrud Grug: Was heißt ≫ Neue Subjektivität ≫ in: Merkur 356 Hft. 1, 32. Jhrg. Jan. 1978 (S. 60-75)  
彼女もこの論文の中で、新しい詩の特徴として、その「現在性」を指摘している。彼女はまた全体にわたって、「アクトセンテ」の批評家たちよりずっと好意的に新しい詩人たちを解説しようと試みているが、この論文について述べることは別の機会にしたい。
- (20) Niclaus Born: Gedichte 1967-1978 Rowohlt S. 114ff Im Innern der Gedichte